



石川鏡介

# 桃源境

## ものがたり

第一部  
巻第一  
第二章

石川鏡介

Art:  
J.P. 金堂

第一部

巻第一

第二章

(一)

(これは夢なんだ。夢であつてくれ！)

明<sup>あき</sup>は心の中で叫んだ。

いまさらそんなことを思つても意味が無いと知りつつ、繰り返して叫んだ。

誰も踏み込まぬような深い山の中の洞窟に入り、多量の睡眠薬を飲み、自殺を図つたが死に切れず、意識が戻つてから出口を探し、再び意識を失つた。そして再度目を覚ました時、自分には不思議な世界にいた。そこは「落人の里」で、まるでなん百年も前にタイムスリップしたような感じだった。

落人の里では、「神の子」と崇められた。

タイムスリップなどありえない、おれが救世主だの神の子だのと尊敬されるなどありえない、これは夢なんだ、と思いつつ、里の人々の精一杯のもてなしを受け、それなりに喜び、浮かれたりしたが、そんな「平和」な生活は長く続かなかつた。

落人の里から少し離れた山の中で、あらぬ妄想をしている間に、落人の里では異変が起こつていた。

明を「救世主」と崇めた里人たちが何者かの襲撃を受け、次々と死んでいき、「御方様」と呼ばれていた老婆までが殺され、里が壊滅状態となったのだ。

明は逆上し、里を襲った謎の集団を撃退した。が、時すでに遅し、里の人々は死に絶えた。

（やはり夢なんだ。そうだろう。悪い夢だろう。だったら早く覚めてくれ！）

明は心の中で叫び続ける。しかし、幾ら強く思っても、実際に叫んでも、夢が覚めることはない。

「おれはどうしたらいい。どこに行ったらいい！」

夢から覚めないかぎり、明に帰る場所は無い。安住の地などないのだ。

末期の苦しみを物語る里人たちの死に顔が彼の脳裏によみがえる。もう、里にすることはできない。

かといって、自分の家がないのはもちろん、落人の里の人々以外に知り合いなどいないのだから、どこに行くというあてもない。では、どこへ行けばいいのか。

あの里人たちは赤い血を流し、目を大きく見開き、全身の筋肉を硬直させていた。口からも血を流し、肌はもう血色をなくし不気味なほど白くなっていた。

里の人々をあのような目に遭わせたのは何ものなのか。

平地の間など踏み込めないほどの山岳地帯で、よそ者の侵入を許さないようにと様々な工夫もなされて、要所に見張りも

居たというのに、なぜ、襲撃されたのか。

「裏切り者だ。裏切り者がいたんだ」

さぶろうという若者は、死ぬ間際にそう言った。

「裏切り者とは何者のことなんだ」

盗賊か何かの仕業ではなく、裏切り者がいるんだという根拠があるから、さぶろうはそう言ったのだろう。

隠れ里の人々も鉄の結束で結ばれていたわけではないのだとしたら、裏切り者が現れても不思議ではない。その裏切り者が敵に通じて里を滅ぼしたのか。

「それならば、誰が？」

そして、裏切り者がいたとするなら、その裏切り者は何のために裏切ったのか。里を滅ぼして、その者に何の得があるというのか。

いくら考えても分らない。

「もしや、御方様の一族を滅ぼしたという、よだまさまとかいうヘンな名前の敵が？」

明は考えをめぐらす。

「いや、それにしては……。長い間、隠れ里は敵にも見つからず、平穩を保っていたというじゃないか。それが、なぜ、今になって」

疑問が涌くばかりである。

「二十年。二十年待ちました。あの城へ帰れるときを。ずっと耐え忍んでまいりましたぞ。帰れる機会が訪れるものと。あ

なたさまこそ、神のお使い。我らをたすけてください」

明を神の子と崇めた里の「御方様」はそう言ったのだ。

二十年も夜田氏に知られなかったのに、何故いまごろ知られたのか。裏切り者がいて夜田氏に通じたというなら分かるが、隠れ里が作られた頃ならともかく、二十年も経ってから里を襲撃するとは、どういうことなのか。意味があるのか？

「はてしなく深い山奥なんだ。山賊が狙うようなものなど無いのだから、あれは山賊ではないだろう。統率のとれた集団だった。何かを探しているようでもあった」

明は考えをめぐらした。

「里の人々といつても、戦えるのはさぶろうやおゆみさんぐらいなものだった。夜田にとつては恐るべき敵ではなかったはずじゃないか」

そう呟き、あつと叫んだ。

「そうだ。おゆみさんは何処に！」

落人の里の若者は、夜田氏の動静など、下界の様子を探りに行ったということだった。そのうちの二人、さぶろうとおゆみがたまたま戻っていた。さぶろうは死んだ。では、おゆみはどうしたのか。

明は自分がこの夢か現実かも分からないような謎の世界に入り込んだ時に最初にみた小集落へ急いだ。

小集落が近づいた時、異様な臭いが鼻をついた。

御方様たちのいた集落の、惨殺死体から漂ってきた臭いと同じだ。

「やはり……」

集落が見えた。家の前には里の老人たちが倒れている。あたり一面はまさに「血の海」と呼ぶに相応しい状態。

「なんてことだ」

明はその場に立ち尽くした。

老人相手に、なんてひどいことをするんだ、と怒りがこみ上げてくる。

彼らには無数の傷痕があった。鋭利な刃物で突かれ、えぐられたような痕。刀か何かで斬られた痕。頭部や胸部を斬られ、止めでもさしたのか背中には深く刺した痕が。

そんな惨殺死体ばかりだった。

その中におゆみの死体はない。

惨殺死体を目の前にして茫然となっていた明だが、気を取り直したように家の中に入り、おゆみの姿を探した。

だが、それでも見つからない。

明はもう一つの小集落へ急いだ。

「おゆみさんは生きているのか、それとも」

自分を神の子だの救世主だのと呼んだ者たちがみな死体となっている。明の心から光が失われそうだった。その失われそうな光が保たれるか保たれないかは、おゆみの安否にかかっていた。

明は光を求めるような気持ちで走った。

しかし、もう一つの集落で見たものは、やはり、老人の惨殺死体ばかりだった。

おゆみの姿はどこにもなかった。

しばらく経ってから、明は隠れ里を守るために設けられた見張り所へ飛んだ。文字通り、「飛んだ」と言ってもいいような速さで駆け抜けた。

まず、この前に里の者に案内されて行つた北の見張り所へ向かった。

月も出ていない夜中に、たいまつ一つで険しい山道を駆け抜けた。

リュックの中にあるペンライトの光では弱すぎる。やはり、たいまつの方がよかった。

そのせいでもないだろうが、朝はやくに出発して夕方に着くような距離を半分の時間で駆け通した。

北の見張り所に着いた。

異臭が漂っていた。

目の当たりにした光景は、見張りの者の惨殺体。

「やはり、神の子ではなく、疫病神だったな」

さぶろうが言った言葉が脳裏に甦る。救世主や神の子と言われた自分が現れたと勝手に隠れ里が滅びた。死体が声を放つたら、惨殺された里の老人たちも自分のことを「疫病神」と呼ぶ

だろう。

明は北西の見張り所へ急いだ。

そこにもまた見張り番たちの遺体があった。

まるでテレビ番組のくどい演出のように、同じ場面が自分の前で繰り返され、明は心のバランスをとるのに必死だった。

こうなると、どの方角の見張り所へ行つても同じような気がする。

それでも「もしや西の見張り所に」と思い直して西へ急いだ。不思議と疲れは感じなかった。

岩山や崖の多い山深い土地で、周囲は険しい山、深い谷、断崖絶壁ばかり。さらに、隠れ里の存在が平地の人間に知られないように山地の入り口付近にはいろいろな工夫がなされていて、平地の人間が侵入できないようになっていたことだったが、それでももし何か変事が起きたら、急を報せられるように、見張り所から里の中心までは、一日がかりの距離ながら、一本の道で結ばれていると、里の者が語っていた。

道は見張り所から異状を報せるために設けられたので、集落と見張り所、そして見張り所と見張り所を結びつけるだけのものになっているのだ。その分、一度敵の侵入を許したら全滅のおそれもある。

「それにしても……」

里を襲つたあの黒装束の連中は、何処から侵入し、どこへ消えたのか。

明は走りながら考えた。

夜田氏にかかわりある者どもならば、里の東側から進入して集落を襲い、そのあとで北や北西の見張り所を襲ったのか。北や北西はこの前、俺が里の人に案内されて行つた。その時にはなんの異変も無かつた。だから北や北西から侵入したとは考えにくい。それとも、俺が行つた直後に侵入したのか。

「いや、考えているだけでは何も分からない。おゆみさんの行方も分からないはまだ」

明は走る速度を上げた。

そして西の見張り所に着いた。

目の当たりにした光景は、やはり北や北西と同じだった。

「うう……」

明はその場にうずくまつた。これまでの疲れが一気に、どつと出た。

見張り所が三ヶ所もやられているということは、やはり裏切り者がいたことだろう。そうとしか考えられない。ならば、南西や南の見張り所も同じことなのだろう。

明は座り込んだまま考えた。

見張り所のあるには抵抗した形跡があつた。不意打ちではなかつたようだ。そして御方様の居た集落と同じく、物色された形跡もあつた。

「とにかく、東の見張り所の様子だけは確かめておかななくてはならない」

万が一、そこが無事だったら、東の夜田氏は関係ないのかもしれない。しかし、東の見張り所の者たちが殺されていたら……。

敵が何もので裏切り者が誰なのか、おゆみさんが何処にいるのか、そのようなこともさっぱり分からなくなる。

謎を解明する第一歩は、まず、東の見張り所を確かめることから、だ。東の見張り所への道は明にとつて未知の領域だが、行けないことはない、と明は思った。

走り出してからの彼はただ、

「東に何があるのか？」

それだけを考えて進んだ。

どれだけ歩いたろうか。

夜が明け、日が昇り、日が西へ傾きかけた。そして明は東の見張り所らしきものを見つけた。

そこにはすぐに解体できるテントのようなものがあつた。

北や北西、西の見張り所は、粗末なものながらも一応は小屋になつていた。それが東側では解体しやすいものになつていのは、それだけ、東に対する警戒がずっと続いていることを意味しているのではないか。

明は歩を進め、息をのんだ。

テントのようなものの中に一人の人間が倒れている。隠れ里の人間らしい。

もちろん、息などしていない。それどころか、死臭が漂い、死後、相当な時間が経過しているようだ。それも、北や北西の見張り所の者が殺される以前のように思える。

争った形跡も無い。後頭部は陥没している。

(やはり、そうか)

近くには岩穴があった。明はその中も覗いてみた。

そこでは二つの死骸があった。ここでは御方様の居た小集落や北、北東、西の見張り所と違い、争った形跡もなく、物色されたような跡もなかった。そして、死体の頭部には、激しい打撲痕があった。

(ということとは……)

明は考えた。あの黒装束の集団が音も無く忍び寄ったとしても、殺される瞬間まで気づかなかったとは思えない。侵入者に気づくなら立ち向かうはずだし、誰かしら里の中心の御方様のもとへ急を報せに行くはずだ。その様子が無い。全くの不意打ちを食らったという感じだ。

それは、仲間と思っているものをテントみたいなものの中に入れ、そこで不意打ちを喰らい、後頭部を激しく打たれたという事。その時、岩穴にいた二人は休憩でもとっていたのか、眠っていたのか、異変に気づくことなく、敵の侵入を許し、これも不意打ちを喰らった。そういうことだろう。

死骸から出た血の色はすでに赤茶けたものになっている。時間が経っているということだ。

明は合掌した。

(二)

もう、日が暮れかかっていた。

山地の日の入りは早い。落人の里は深い山の中にあり、特に西へ行けば行くほど標高の高い山ばかりとなっていた。だから平地よりも早く夜が訪れる。

明は見張り所から先の景色に視線をそそいだ。

さすがに見張り所というだけのことではあった。山なみは果てしなく続くかに見えたが、山の高さは徐々に低くなっている。

そこまでの間に横たわるのは険しい山々だが、眺望がきくので格好の見張り所となっているわけだ。そして、見張り所のすぐ前は断崖絶壁だった。

断崖の上には長い縄梯子があった。どうやら、落人の里の若者が平地へ出たり、里に戻る時に利用するものらしい。岩穴の近くの大木の幹にしつかりと結び付けられ、断崖の下へさがっていた。

明は縄梯子に手をかけた。

高低差がどれほどあるのか分からない。が、とにかく降りるしかない。

山の中にいるだけでは何も分からない。ずっと孤独だ。南西や南、南東の見張りへ行っても同じことのような気がする。仮に、それらの見張り所が無事だったとしても見張り所の人に何

を言えばいいのか。

おゆみさんが居るかどうかも分からない。こうなったら人の多い場所へ出るしかない。と彼は思った。

ひとつひとつ、足をかける位置を確かめながら降りて行く。山岳地帯を駆け抜け、集落から北、北西、西の見張り所を休み暇なく行き、さらに東の見張り所まで来たというのに、全然疲れていないのが不思議と言えは不思議だった。

それは自分が悪い夢をみているせいなのでは、と明は思ったが、すぐにその考えを自ら否定した。

「そんなばかな」

夢ならばとづくに覚めているはずだ。それなのに全然覚めな  
いではないか。認めたくはないが、夢ではないと現実を受け入  
れるしかない。自分に岩を割る力があつたり昼夜ぶつとおして  
山道を駆け抜けても疲れないほどの体力があるのは不思議でし  
かたないが、覚めない夢は無いのだ。覚めないところをみると  
やはり現実のことなのだ。

雑念を振り払うように、明は首を振った。

一息つき、また一段下に足を降ろした。

自分でも、こんな崖を縄梯子一つで降りる勇気があつたかと  
不思議に思う。

いつの間にか、周囲が霧に覆われていた。

もともと断崖を降りている最中のことである。視界が悪くな  
っても同じことだった。ただ、手が滑りやすくなるのでは、と

心配になった。

「こころなしか、縄が掴みにくくなってきたようだ。

「くそっ」

握力も落ちてきたように感じる。

「滑り落ちるわけにはいかないぞ」

不安が募る。

やがて、雨が降ってきた。

いつになったら崖下にたどり着くのか分からない。

見張り所に踏みとどまるか、南の見張り所を目指せば良かつ  
たか。

そう考えた瞬間、

「ああっ」

手が滑り、明の上半体が後方へのけぞった。

「だめだっ！」

彼の身体は奈落の底へ落ちて行つた。

明は目を開けた。

身体じゅうがしびれている。頭の中も、なんだか、霧がかか  
つたような感じだ。

（ああ、俺は、崖から落ちてしまったんだな）

思い出すまでしばらく時間がかかった。

力が入らない。相当な高さから落ちたのだろう。

それでも生きている。

「ふうふう」

明は大きく息をついた。

背中から落ちたようだが、背負っていたリュックがクツションがわりになったのだろうか。衝撃が少しは和らいだらしい。

落ちてから、どれだけ時間が経ったのだろうか。自分が気絶していたことは分かったが、時刻が分からない。

雨は止んだらしい。顔は濡れているようだが、滴が顔面を打つことはなかった。

明は両手を動かした。

手はゆっくりと動いた、

手が動くのを確かめると、明は上体を起こした。

周囲は闇に包まれていた。

なんとなく、けだるい。

(夜が明けるまで待つべきか)

そう考えた。が、待てなかった。里を襲った者どもの正体を早くつきとめたい、という気持ちを抑えきれなかったのだ。

ふらつきながらも歩を進めた。

もう、たいまつは無い。

リュックの中からペンライトを取り出した。

闇の中をペンライトの明かりだけで歩くしかない。危険なことは分かっているが止まらない。自分が何故、この、わけの分からない世界に来て、わけの分からない状況に遭遇したのか。

それが分からないままではいられない。早く謎を明らかにした

い。その思いが強かった。

ペンライトをつけた。

「よし！」

弱いながらも明かりがついた。

崖から落ちた時の衝撃でも壊れなかったらしい。

(ここは下りの急斜面か?)

足元の様子を見て、

「気をつけて進まねば」

ふうつと息を吐きながら彼がひとりごとを言ったその時、足元が崩れた。

「ああっ！」

彼はまた奈落の底へ落ちた。

ああ、やっぱり俺ってバカだな。

遠ざかる意識の中で、明は痛いほどに思った。

そしてまた気がついた時、薄暗い世界にいた。荒地地のような場所である。

(ここは?)

なんか、いつか何処かで見たことあるような、と彼は思った。

いっただろう。思いだせない。

首を捻って考えてみた。

そのうち、かすかな音が耳に入った。

キイイーン、キイイーン。



そんな音が、やがてチイイン、という音に変わった。

そして、その音は徐々に近づいてくる。

チイイン、チイイン。

鈴の音のようだ。

(聞いたことがあるぞ)

明は目を凝らした。

何かが近づいてくる。黒い影だ。

鈴の音のような音が大きくなるにつれて、影もまた大きくなつた。

「なんだ、あんたか」

洞窟に入つてこちらの世界に迷い込んだ時、気を失い、再び目をあけた時には落人の隠れ里の家の中にいたが、目を覚ます前に夢をみた。その夢の中に、巡礼のような姿の不思議な人物が出てきた。

「また会つた。ということは、これは夢か」

明は苦笑した。

謎の人物はまた、あの時と同じように、明の目の前で立ちどまつた。

明は、今度は無遠慮に相手の顔を覗き込んだ。

あのとき聞いた声は女性のものだったが、今自分が見ている顔も、まぎれもなく女性のもの。

「？」

若いようでもあり、若くないようでもある。どこかで見たこ

とあるような、と明は思った。

「そなた……」

謎の人物が明の目を見て言った。

「この世を照らす光となるか。この世を救う光となるか。闇に包まれたこの世を救うには、三つの宝。これが集まらねばならぬ。三つの宝、三つの宝じゃ」

「えっ？」

明が驚きの声をあげた瞬間、目の前の人物は姿を消した。

小鳥のさえずりが聞こえた。

身体が少しあたたかい。

明はゆつくりと目をあけた。

木漏れ日が明の面に降り注いでいた。

夜が明けたらしい。

やはり夢だったのだ。

(それにしても、何故、同じような夢を見るのか)

そう思いつつ、明は手足を動かしてみた。

やはり、痺れがある。気だるさもある。が、全く思い通りに動かせないというわけではない。

「よっ、と」

ゆつくりと立ち上がった。

謎の巡礼のことだけでなく、落人の隠れ里のことも、見張り所のこと、すべて夢だったら、などと思いつつ、また急斜面

を降りた。

今度は明るいので足元の様子がよく分かった。

滑るように、時には落下するように急斜面を降り、樹木の幹に取りつき、また滑るように、落下するように降りる。そうして道の無い山をはてしなくくだって行った。

やがて、険しかった斜面が緩やかなものに変わった。

谷川のせせらぎが耳に入った。

溪流が近いらしい。

また急斜面があつた。

それを降りきると、清流が目に入った、水量は少ない。溪谷の川というよりは「沢」だ。深くもない谷の底に下りたのだから、と明は察した。

谷底いっぱい水が流れているわけではないので、沢に沿って歩けないこともなかった。時には人の背丈くらいの高さの巖に上り、乗り越え、時には自分の腰の高さくらいの岩を越え、時には小石ばかりのちよつとした川原のような場所を歩き、明は下流へと進んだ。

しばらく行くと谷の幅が少し広くなった。と同時に、沢の水深も浅くなった。浅くなりすぎた沢の水は、やがて岩と岩、石と石の間に吸い込まれるように無くなり、岩の合い間の砂利の道のようなものが出来ていた。

明はその道を進んだ。

石ころだらけの道を行く。石を踏んでいるわけだから、本来

ならば足の裏が痛くなるはずだ。だが痛みを感じない。

崖から落ちた時も、気絶したがその後は痛みを感じないで、痺れだけがあつた。

(なぜ、痛みを感じないのだろう)

そんなことをぼんやり考えながら進んだ。

—ガサツ、ササツ、

—ザツ、ダサツ、

いきなり、頭の上で奇妙な音が起こった。

明は音がした方を見上げた。

谷に面した山の木の枝が少し揺れている。

「サルでも居るのか？」

明は呟いた。

姿が確認できないのでは、考えても仕方がない、と、また歩きだした。

進むに進むごとに山は低くなり谷も深いものではなくなった。そして、歩いている谷に別の場所から流れ込んできた沢が滝となって落ち込み、また急な流れとなった。

これまで歩いてきた谷の底に水が流れていたなら、それなりに大きな川になっていたかもしれない。

そう感じて周囲を見回す。

「あつ？」

斜面の少し上に小さな道のようなものが見えた。

明は斜面をよじのぼった。

やはり小道があった。けものみちではないようだ。だとすれば、人里が近いということではないか。

明の歩調がはやまった。

それからどれくらい歩いたろうか。いや、実際は歩いたというより駆けたと言っている。

そしてついに、人家を見つけた。草葺き屋根の、丸太を組み合わせただけのような、粗末な家だ。大風が吹けば倒れそうなものだ。だが、確かに人の家だ。

近くに駆け寄る。また少し離れたところにも草葺きの屋根の家があった。

「だれかいますか」

明はそう声を駆けようと思ったものの、やめた。

自分の姿を振り返ってみる。落人の隠れ里に居たことが夢であつて、今自分がいる場所が現代の日本ならばいいが、そうではない、ならどうなる？

「神の子」などと言われるとは限らないではないか。いきなりヘンな野郎が出てきた、とばかりに腰を抜かすものかいてもおかしくない。

明はそう思った。

とはいえ、今さら引き返せない。なるようにしかならない。とにかく、人の多くいそうな場所に出て相手方の反応をみようか。そう判断して、さらに進んだ。

しばらく行くと、平地の開けた場所に出た。

そこには集落があり、広場があり、畑らしく耕された土地と井戸があった。

「しかし、ここは……」

明はそう言ったまま、しばらく声が出なかった。

気になるのは人の姿がないこと。家々は堅く戸締りがしてあるようだが人の気配が無い。畑もなんだか荒れはてた様子である。

風が吹いてきた。土ぼこりが舞った。

昔の時代劇に出てくるような、貧しい農村の情景のようだと明は思った。

（でも、家があるんだ。畑もあるんだ。誰もいないということはないだろう）

明は決意し、集落の家々のうちの一つに近づき、入り口の引き戸らしきものに手をかけた。

その時、

「さわるな！」

鋭い叫び声が背後で起こった。

(三)

明は振り向いた。

久しぶりに聞く人の声。しかし、それは「あたたかさ」とは程遠いものだった。

声の起こった方には集落の家がかたまつてあるだけ。人影ら

しきものは無い。

「？」

明は周囲をみまわした。

やはり、なにも見えない。朽ち果てる寸前のような粗末な家がならんでいるだけである。

また、向き直って戸に手をかけた。

その時、何かがうなりを上げて飛んできた。

その「何か」は明の方をかすめて戸の端に当たった。

握りこぶし大の石ころだった。

「な、なんだ、なんだ？」

明はおそるおそる振り向いた。

先ほどより強く風が吹いた。砂埃が舞い、明の目にも砂が入った。

目をつぶり、痛さを感じないのでまた開いた時、明の視線の先には土煙があった。

土煙がなくなつた時、視界に現れたものは、悪意に満ちた黒い一団だった。

それこそ昔の時代劇や歴史漫画でよくみるような、ぼろをまとつた農民の集団。一揆でも起こすかのように、鋤・鍬や鎌、竹槍などを持ち、髪は乱れ、目はつりあがっている。

「ああ、あ、あの……」

明が言いかけた瞬間、

「キミヨウナナリヲシヤガツテ！」

「ナニモンダ、オメーハヨオ！」

「オニジャ、オニジャ。オニニチゲエネエ！」

黒い一団から叫びが起こり、同時に、石が飛んできた。

「あつ！」

黒い、小さなものが弧を描いて飛んでくる。その黒いものは大きくなり、こぶし大となつて目の前に迫った。

明は戦慄をおぼえた。

慌ててよけた。

また飛んでくる。また今度はほぼ一直線だった。

野球やテニスのボールではない。硬く、とがった部分もある石ころだ。それがうなりを上げて飛んでくる。

やけに大きく、硬いものに見える。自分が痛みを感じなかつたんだということも忘れて、明は、

（こ、こんなものをまともにくらつたら、たまつたもんじやないよ）

と思つた。

足がすくんだ。

「ちよつと、ちよつと、まって」

上体を左右に振つてよけたが、

「ナンカイッテルゾ」

「オニジャ、オニノコトバジャ」

「ミミヲカスナ。ミミガクサルゾ」

「オニメ！」

「ヒトデハナイワ」

「オニメ、オニメ！」

罵声と石つぶてが突風のように襲い掛かった。

「ちがう、ちがうんだ」

「オニー！」

「オニジャ」

「オニジャ！」

たまらず、明は右手の方へ駆け出した。

「ワッ！」

「アレッ！」

「オニガキタゾ」

「コワイ！」

「ヤラレルナ、ニゲロ」

明を取り囲んでいた集団の一角が崩れた。

「アレ、オニガイク」

「ニガスナ、イシナゲロ」

「ヤツツケロ。ヤツツケロイ。サモナイト、ワザワイガコノ

ムラニオヨブゾヨ」

「ソレ、イシナゲロ」

罵声を石つぶてを背に受けながら、明は後ろを見ずに無我夢

中で走り続けた。

なんなんだ、いったい！

彼は心の中で叫んだ。

ようやくたどり着いた村。しかしそこで待ち受けていたものは歓迎とは程遠いもの。いや、歓迎どころの話ではない。激しい憎悪と罵声。そして石つぶて。

この世で何が怖いといって、他人の憎しみを買うことほど怖いものは無い。それも、身に覚えのあることで憎まれるのならまだいい。原因が自分にあるのなら自業自得。自分のせいなのだ。だが、わけも分からずに憎まれたり差別されるといふのは恐ろしい。

(やはり、この格好がいけなかったのか)

明は自問自答した。

たしかに、彼らからすれば奇妙なことこのうえない格好だろう。それにメガネなど見たこともないだろう。この世のものか、と思うのは無理も無いかもしれないが、でも、あの山の中の隠れ里では「あなたさまは神の子では」と言われたんだぞ。なのに、この違いはどうだ。

そんなことを思いながら走り続けた。

やがて、走り続けることにも飽き、もうあの連中が追ってくることもあるまい、と思つて走る速度を緩め、周囲を改めて見回した。

そこは荒地地の中の一本道だった。

畑も無い。いや、畑らしきものは、あるにはあるが、ひどく荒れ果てている。ところどころ樹木があるが、それらは枯れている。小川らしきものはあるが、水はほんのちよつとしか流れ

ていない。

明はやや落ち着きを取り戻し、走るのをやめて歩いた。

そして歩きながら考えた。

集落に着く前、谷川で「ガサツ」という物音を聞いた。それは猿か何かだろう、と思ったが、実は集落の人間だったのではないか。その者が自分の風体を見て、集落に戻り、怪しい人間がいると報せたのだろう。

それを聞いた村人たちが戸締りをして、集まり、異質なものを排除しようと、石つぶてを持って待ち構えていたのではなからうか。

そう思うと、すべて脱ぎ捨ててはならないのか、と思うが、かといって裸になるわけにもいかない。それはそれで、じゅうぶん「あやしい人間」になるではないか。

どれだけ歩いたか、いつの間にか薄暗い雑木林の中に入っていた。

少し離れた場所から、「ガサツ」「ササツ」という音が起こった。

何かが動いたのだ。それが猿なのか、人間なのか、分からない。

明は反射的に身構えた。

また音が聞こえた。

明は身構えたまま、耳を澄ませた。

何も聞こえなくなり、気配も消えた。

明は再び歩きだした。

「なんなんだよ」

周囲に気を配りながら進んだ。もう、あのように石つぶてを投げつけられるのは御免だ。

またしばらく行くと、行く手に光が見えた。太陽の光ではない。夕日らしい橙色の光が見えるのとは反対側だ。つまり、明は東へ向かっていたのだが、その東側に赤い光が見えた。

それは松明の火の光だった。

(なんで、こんな時刻に松明を?)

疑問に思いながら進むと、やはり、行く手には村人の一団が待ち構えていた。

「アツ、アイツジャ」

「イタゾオ！」

「オニジャ、オニジャ」

「オニガオツタゾオ！」

村人たちが口々に叫ぶ。

「なんだっていうんだ、まったく」

明は舌打ちした。

北にも松明の灯りが見え、続いて南にも見えた。

「オニジャ、オニジャ」

西からも叫び声が聞こえた。

すっかり取り囲まれた様子だ。

「まったくこれ！」

明は叫び返した。

「おれは、鬼なんかじゃない」

包围の輪が縮まる。

また石が飛んできた。

「鬼じゃないって！」

敵意の無いしるしとしてして、両手を挙げてみた。

「オニジャ」

「オニジャ」

それでも、村人の敵意むき出しの声はやまない。包围の輪もじりじりと縮まる。

「そうだ」

明は考えた。敵意の無いしるしとして、両手を挙げるのが通じないのならば、笑ってみたらどうだろう、と。

顔がよく見える距離にまで近づいた村人たちに向かい、にいと笑って見せた。

しかし、ひきつっていたか、表情が硬かったらしい。

「ナンジャ、アノカオハ！」

「キモチワルイゾ！」

聞くに堪えない言葉を浴びせられる。

「人間だと言ってるのに！」

そしてまたまた、石つぶてが飛んできた。

「ヒトデハナイゾ。オニジャ」

「くそっ！」

興奮とともに、怒りが湧き上がってきた。

(こんなところで殺されてたまるか)

こうなったら、あの手しかない、

と明は思った。

彼は懐からペンライトを取り出した。

そして大きく息を吸い込み、声を張り上げた。

「皆の者、静まれい！」

右手に持ったペンライトを前に突き出す。

「静まれ静まれ！」

村人たちを睨みつけながら叫び続けた。

「我は鬼にあらず。山から下りてきた神の子なり。その証がこの光なり！」

腹に力を込めて大きく叫び、ペンライトのスイッチをオンにした。

ところが……、

取り囲んでいる集団は少しもたじろがない。

それどころか、ちよつとの間だけ静かになったものの、

「ナ、ナンジャ。ナニモオコラヌデハナイカ」

「ナニガガミノコジャ」

ざわめきが起こり、

「カミヲナノルトハ」

「ヤマカラキタトイツタン」

「ヤハリ、オニジャ」

「オニジャ」

またしても「オニジャ」の大合唱が始まった。

明はペンライトのスイッチをカチカチと鳴らす。しかし反応が無い。どうやら電池切れらしい。

「なんてこったい！」

明は血の気が引くのを実感した。

「オニジャ」

取り囲んでいる輪が少し縮まる。そしてついに、明を取り囲んでいる農民のうちの一人が、松明を頭上たかく掲げ、

「アイテハオニジャ。イシヲナゲルダケジャア、クタバラネエゾ！」

後ろに振りかぶると、

「コレデモクラエ！」

叫び声をあげて投げつけた。

続いて、もう一人が投げつける。

「あつ、ちくしよう。本当に焼き殺す気か！」

明は大きくはね、火を避けた。

火をよけながら、注意深く周囲を見回した。

南側だけ、人数が少なく、松明も少ない。

近くには棒切れがあった。

明は棒切れを取るなり、南へ向かって突進した。

「アッ！」

「オニガキタゾ！」

人々は後じさりしながら石を投げ、松明を投げる。

明は逆上した。

「うおおおおつ！」

棒切れを振り回し、人々を蹴散らした。

「ヤハリ、オニジャ」

「アレミヨ、アノチカラヲ！」

恐慌をきたして人々が逃げ散る。

明は駆けた。何処というあてもなく。ただ、まっすぐ駆け続けた。

そして、いつしか川のほとりに出た。

夕暮れ時で暗いが、対岸に崖があるのが分かった。

川の流れは急で、石も多い。人の頭くらいの大きさの石もあるようだ。

明は足をとめ、しばらく考えた。川を渡るべきか。渡つても崖がある。それを登るのか。引き返すことはできない。川の流

れに沿って行くべきか。

そのうちに、

「オニヲコロセ！」

「オニヲコロセ！」

「コロセ！」

「コロセ！」

背後から松明が迫ってきた。

川上にも、川下にも松明が見えた。



明は川の中に入った。  
石が飛んできた。

ごっ！

そのうちの一つが頭に当たり、彼はバランスを崩し、川の激流にはまった。

(ああ、溺れる！)

もがいているうちに、彼の意識は遠のいていった。

(四)

明は目を覚ました。

気を失ったのはこれで何度目だろう、と思った。

目の前には何も見えなかった。

闇の中だが、真の闇でもないらしい。少し前方にかすかな光がさしているようだ。

明は横たわっていた。何の上に横たわっているのか彼にはよく分からなかったが、やがて、頬や耳、手足などの感触で、岩か石畳のようなものの上に自分が寝ていることを知った。

(なんなんだ、ここは)

そう思いつつ、身体を動かしてその光の方へ進もうとした。

しかし、手足が動かない。

「これは？」

手足を縛られているらしい。

「ううっ」

もがき、蝦が跳ねるような動きをしながら徐々に光の方へ近づいて行つた。

その先には木で作られた格子があった。

格子の外は宵闇。月の光が差している。満月らしい。

月の光が格子を照らしていたのだ。

それで明には自分を取りまく状況が分かった。

前方は格子。右や左は岩壁。頭上も後方岩。つまりは岩穴に  
いるということ。格子はまさしく、時代劇などでよく見る、罪  
人が囚われて押し込められる土牢に似ている。いや、岩穴だから  
岩牢なのだ。

「鬼だからということか。この俺が、鬼か。なんということ  
だ。隠れ里では『神の子』などと言われていたというのに。な  
んなんだ。この違いは」

明は格子を見つめながら独り言を続けた。

「節分の豆まきじゃあるまいし、石を投げつけるなんて。ひ  
どすぎるじゃないか。俺の顔をよく見ろつて。角なんかないだ  
ろ。俺が何をしたというのだ。あいつらの方がよっぽど鬼みた  
いだ」

ここで言つても仕方ないと思いつつ、悪態をついた。

「鬼め。ここは鬼の村か」

月の光を見、それが満月であることを知った。

「ということ、あれから何日が経つたんだ？」

山の奥の落人の隠れ里に居た時は、新月だったような気がす

る。それから隠れ里が謎の集団に襲われるまでほんの数日。たしか四日だったような。それから、北の見張り所や北西の見張り所、西の見張り所へ行つた。東の見張り所に行つた。そうして山を越えて平地の里へ降りてきて、「鬼」だと言われ追い詰められた。

「では、ずいぶん長い間、気を失っていたことになるじゃないか？」

明は指折り数えて時の経過について考えた。

そんなに長いこと気を失つていて、縛られているものの体力はそれほど落ちていないような気がする。あの隠れ里では手刀や頭突きで岩を割り、東の見張り所から平地に出るまでは二度ほど崖から落ち、気を失つたもののそれほどの大怪我をしなかつた。そして村人たちに囲まれ石を投げつけられても、瀕死の重傷にはならずこうして生きていく。

（おれは不死身の身体を得たのか？）

そんな思いが湧き上がる。

それをすぐに打ち消し、

「いや、そうじゃなくて、重傷だったけど奇跡的に回復したということなのか？」

と呟いて首をひねつた。

と、その時である。

サツ、ガサツ、サツ。

草でも踏み荒らすような音が格子の向こう側で起こつた。何

者が近づいたらしい、と察して、明は音のしたほうを見つめた。

犬や猫か、ウサギのような小動物かと思つたが、そうではなかつた。

黒い影が目に入った。大きな影だ。影は月の光を浴びて形をあらわにした。

「誰だ？」

明は思わず声をあげた。

見えたのは、まぎれもなく若い女の姿。

「おゆみさん？」

明は反射的にその名を口に出した。

「ふふっ」

かすかな笑い声が起こつた。

女はさらに近づいた。見る角度が変わり、月の光が直に女の顔を照らした。

おゆみではなかつた。おゆみよりもずっと大柄で目鼻立ちのハッキリした女だつた。

「この牢に入れられたばかりで、うなされていた時にも、その名前をうわごとのように口にしていたわね」

「えっ」

はじめて見る女にそう言われて、明は自分の顔が紅潮するのを感じた。

「ふふ」

女がまた笑った。

「キミは？」

明は女の頭から足の先まで見つめた。

着ているものは貧しい農民のものらしく、粗末で汚れているようだ。洗いざらして裾も短い。足はわらじ履き。頭はなぜかおかつぱ頭。それでいて、顔は大人びている。肌の色は月の光の下なのでハッキリとは分からないが浅黒いようだ。そして目は大きく、目じりが少し上がっている。満月の光の下でその目を見ると、まるで猫のように感じた。

女はまだ笑っている。

「おゆみさんって、どんな人なのかしら。鬼の子さん。いや、神の子さんと言った方がいいのかしら」

「キミは、なにもの？」

「あたし、おはるといふの」

女がやつと明の質問に答えた。

「村のみんなから聞いたわ。鬼の棲む山から、ヘンな姿の男が来たってね」

「……」

「その男は、神の子と名乗ったというけど、とうてい、神の子とは思えない姿だって。それに、あの鬼の棲む山から来たというのですもの。神だなんて言っても、誰も信じないわ」

「お、鬼の棲む山……」

明は啞然となった。

が、そういわれてみれば分かるような気がする。

人を寄せ付けない、断崖絶壁ばかりの山々なのだ。平地の村の人々にとつては、その奥に落人の隠れ里があるとは思わなかったのだろう。もしかしたら、隠れ里の人々が、それもおゆみさんのような若い者がわざとそのような話をつくって、山に人が入らないようにしたのかもしれない。

明は一瞬のうちにそこまで考えた。

「鬼の子さん。あなたは村の人たちが言うように、あの山から下りてきたの？」

「ああ、山から下りてきたのさ」

おはるといふ女の問いに、吐き出すように答えた。

「だが、あそこは鬼の棲む山などではなかった。鬼じゃないんだ。おれにとつては、桃源境」

「えっ」

「こちらの村の人間のほうが、よっぽど鬼みたいだ」

おはるといふ女の顔から笑みが消え、無表情になった。

「ふうん。でも、あんたはただのひとではないわ」

「ん？」

「あれだけ石を投げつけられても、はげしい流れに吞まれて川でおぼれて、岩に叩きつけられも、川原にうちあげられて村の人々に棒で頭を叩かれても、竹やりで突かれても、鎌や鉞やら何やら、刃物で斬りつけられても、傷ひとつないんだもの。人とは思えないわ。鬼の子か神の子か、どちらかだと思おう」

「……」

そうだったのか、と明は心で叫びながらも、声には出せなかった。

おはるの語るところによると、明が村人に取り囲まれ、南の方へ突進して囲みを破り、川のほとりへ出て、また追われ、石を頭に受けて激流に足をとられた時、たしかに彼は溺れた。そして激流に押され岩に頭をぶつけた。さらに、下流に流され、浅瀬から川原に打ち上げられたが、その時には追ってきた村の人々に「鬼め！」と罵られ、袋叩きにあい、それでも息絶えない様子なので「鬼はこれくらいのことでは死なないようだな」「斬り刻め」と叫ぶも者の声によつて首に刃を当てられた。

ところが切れない。傷がひとつもつかない。これぞまさしく鬼の身体だ、とばかりに村人はおそれおのき、明の手足を固く縛り、この岩穴に押し込めたのだ。

それから何日も経ったというのに、水も食糧も与えられなかったというのに、明は生きている。

村人は恐怖し、岩穴に近づかなくなった。そのかわり、女のおはるだけが明に興味をもち、夜、人目をしので様子を見に来っていたのだという。

「ふうん。そうか。やはり不死身の肉体に」

明がしみじみとした口調で呟いた。

おはるはそれを聞いて「ふっ！」と吹き出した。

「まるで、不死身ではなかったみたいね」

なんとも屈託の無い笑顔だった。

明は、おはるの声から受ける印象が村人からのそれとは全然違うことを実感していた。

村人たちの声は無機質で、感情がないようだった。だが、おはるの声は違う。温かく、心を通わせられるものだ。

（あ、そういえば、隠れ里の人々もこんな声だった。おゆみさんも。そうなんだ。あの俺を鬼と罵った村人たちだけが冷たい声だった）

明はそう思った。

そして、おはるの顔をじっと見つめた。

おはるがまた口を開いた。

「あたし、食べるものを持つてきたの。鬼の子さんが鬼らしくなかったら、食べさせてあげようと思つて」

おはるはふところから何かを取り出した。

それは握り飯だった。

「これを？」

「毒なんか、入ってないわよ」

おはるがまた笑った。

「でも」

明は苦笑いを浮かべ、

「おれはこの通り、手足を縛られているんだぜ」と言った。

「いいのよ。口を開けて」

おはるは格子の隙間から、握り飯を持った手を入れた。

「ほら、アーンって、口を大きく開けて」

「あ、ああ」

気恥ずかしいな、と思いつつ、明は言われるままに口を開けた。

握り飯に噛み付くようにして、久しぶりの食事をとる。それはおよそ食事らしくないもので、飯も冷えていたが、明にとつてはある意味ぬくもりを感じるものだった。

落人の隠れ里で食べ物を出された時に感じたように、味らしい味を感じなかったが、それでも、

「うまい」

と明は言った。

そして握り飯をまるごと食べた。勢い込んで食べたでせいで胸焼けがして、

「うう、ううん」

苦しさに、しばらく言葉も出なかった。

おはるはまた笑顔を見せた。

その笑顔につられるように、明は自分の身の上を語った。この世界とは全然違う文明社会というものに生まれ、生活し、悩み、自分で命を絶とうと山深い秘境の洞窟に入り、大量の睡眠薬というものを飲んだこと。それでも死ぬえず、洞窟を出た時に気を失ったこと。目が覚めたら落人の隠れ里にいたこと。そして落人の隠れ里での出来事。おゆみという若い女のこと。さぶ

ろうのこと。隠れ里が謎の集団に襲撃されたこと。見張り所のこと。この村に来るまでの道のりのこと。

おはるは、ただ黙って聞いていた。

いつの間にか、おはるの顔から笑みが消えていた。明は、（やはり、こんな話、信じてもらえないのか）

と思った。

全然信じてくれないのかもしれない。そうでなくても、ちょっとだけは信じてあとほとんどは信じないのかもしれない。でも、それは仕方の無いことだ、と。

はたして、おはるはしばらく無言となった。

やっと口を開いた時、おはるはこのように言った。

「あたしが生まれるよりも何年前、鬼田氏と夜田氏との間で激しい戦があつて、その戦で鬼田氏は滅んだそうよ。それからしばらくは、落ち武者狩りが盛んで、鬼田の一族がどこかで生きているのでは、と、西の山にも夜田の武士たちが入っていた。そう、村の人たちから聞いたわ。でも、山に入った武士たちは生きて帰らなかった。もともと、あの山には毒蛇がいるとも、熊がいるとも、狼の群れが棲み付いているとも言われていたの。それで、落ち武者狩りが生きて帰らないのは、毒蛇か熊か狼のせいだろうと言われたそうだけど、それでも鬼田の領主の奥方や一族のものがいるのでは、と、ある武将が山に分け入ったのね。その武将が行方知れずになって、仲間の武将やその家来たちが探したの。そうしたらね、その行方知れずになっ

た武將の死骸が谷川から流れてきたって。なにか、狼にでも食いちぎられたような痕があったと噂になって、いや、手足を引きちぎられたんだとかなんとか言われて、やはり、あの山には鬼が棲んでいるんだ、と皆が言うようになって、それから、誰もあの山には近づかなくなっただんですって」

「……」

「だから、西の山からあんたみたいなのが下りてきたら、みんな、あれは鬼だ鬼だと叫ぶのよ。ここ数年は凶作続きだし、悪い病気も流行っているし、地震も続いているの。だから、悪いことはみんな鬼のせい。災いの元はみんな西の山の鬼たちだつて、みんな言っているの」

「……」

今度は明がしばらくの無言を貫く番だった。

さまざまな考えが彼の頭の中を駆け巡った。

やがて、東の空に暁の光がさしてきた。

「あつ、もう、帰らなくては」

おはるは振り向くと、慌ててそう言い、明に「また来るから」と言つて小走りに駆け去っていった。

明は黙って見送った。

すでに明の目は闇に慣れ、周囲も朝日が照らす前に徐々に明るくなつていたため、岩穴の様子がよく分かった。穴の奥行きはバス一台分くらいのものであった。高さもちょうどバスの天井くらいのものである。そして、最初に自分が横たわっていた場所に

は、リュックやペンライトがあった。

なぜそんなものであるのだろう、と明は考えた。

考えているうちに朝日が差してきた。

きつと、村の連中はあれらを鬼の持ち物だと見て、忌まわしきもの、村人の手に触れる場所にあつてはいけぬものと考えたのだろう。だからこの岩穴の中に押し込んだのだろう。と、そのような結論に達した。

明は岩穴の牢の格子に身を寄せ、朝の光を浴びながら、自分の身体の内側から信じられないほどの力が湧きあがるのを感じた。

(今に見ている。きつとこの縄をほどいて、この岩穴から抜け出してやる)

そう、心の中で叫んだ。

しかし、彼は知らなかった。おはると彼とが語り合っていたその時、岩穴から少し離れた物陰に何ものかが潜んでいたことを。そして、おはるが駆け去ったしばらく後に、その者がニタリニタリと薄ら笑いを浮かべて夜田氏の支城へと向かったことを。

(第三章へと続く)